中大漕艇部 昭和56年卒
池上 勝也

私が入部した頃のボート部合宿所は、木造二階建ての建物で、二階の大広間に1～4年生が雑魚寝をし、集団生活を送っており、1年生の仕事は買い出し、飯炊き、風呂・便所掃除など少ない人数で毎日練習と合わせて目の回るような忙しさだった。

6月になり新合宿所が完成し、生活環境の改善と共に理工ボート部の専用部屋もでき、理工ボート部の方にも飯炊きや掃除をお手伝い頂くようになった。理工の方たちは親しみやすく、練習の合間に時間があれば理工部屋に遊びに行き、おしゃべりやプロレスごっこ（？）を楽しんだものだ。1年生の仕事がぐっと楽になったのと、理工メンバーとの交流は、厳しい合宿生活の中でも精神的に癒され、夜遅くまで予習・復習で勉強する姿勢に刺激を受けた事を昨日のように思い出される。

私のボートは大学だけでは終わらず、仕事の転勤先で30年以上も関わる事になったが、さほど有能な選手でもなく、ボートが大好きな訳でもなかったのに、ボートの縁が続いたのは、理工ボートの方々との交流を通して、ボートの集団生活の楽しさを味わい、多様な人達との出会いのお陰だと思っている。また、卒業後は殆ど交流が無かったが、最近はOB岡崎さんを通じて理工ボート部の情報も頂けるようになり嬉しく思う。これからも理工ボート部の永続的な発展と活躍を祈念します。

東京海洋大学 漕艇部 主将
嶋田 禎己

中大理工ボート部様の創部55周年、まことにおめでとうございます。この祝典に際しまして、僭越ではございますが、お祝いの言葉を述べさせて戴きます。私は東京海洋大学漕艇部主将の嶋田禎己です。中大理工様とは関東理工系レガッタや合同練習などでご一緒させていただいており、いつもありがたく思っています。海洋大漕艇部は普段は週10～11モーションこなしている海洋大ではかなり特殊（笑）な部活です。ただ、私はボートにかかわる研究をする予定なので特殊なのは私なのかもしれませんね（笑）。今後とも中大理工様と海洋大漕艇部が素晴らしい関係を築いていけることを願い、お祝いの言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

千葉大学漕艇部 第93代主将
笠原 幹央

常日頃よりお世話になっております、千葉大学漕艇部の笠原幹央です。この度は中央大学理工ボート部の創部55周年おめでとうございます。また、このように記念誌に寄稿させていただきありがとうございます。

中央理工の友人とは戸田に行って会うたびに互いの近況を話すなど普段から仲良くさせてもらっています。他にも今井には沈したところを助けてもらったこともあります（あの時は本当に助かったよ…）。新入生のころはボートを通じて他大に友人ができるなどとは思ってもみませんでしたし、中央理工の友人とはお互いこの競技を選ばなければ出会うこともなかったことでしょう。今後進む道でボートから離れたとしても、こうしてできた貴重な繋がりを大切にしていけたらと思います。

短く拙い文章ではありましたが、今後の中央大学理工ボート部の益々の発展をお祈りしてお祝いの言葉とさせていただきます。

早稲田大学 理工漕艇部3年 主将
福島 聡

はじめまして、早稲田大学理工漕艇部3年主将の福島です。この度は中央大学理工ボート部創立55周年おめでとうございます。当部は貴ボート部とは理工系レガッタや合同新人乗艇会においてボートを通して親交を深めてきました。特に最近は両団体共に部員数が増えており交流会の活気が出てきて非常に嬉しいです。日本では圧倒的にマイナースポーツであるボートをわざわざ選んで来た者同士これからも元気に一緒に頑張りましょう！（今井主将、艇が足りなくなるのは嬉しい悲鳴ですね！）

それでは中央大学理工ボート部の更なる繁栄と栄光を期して「アイン、ツヴァイ、ドライ。ウォー！ウォー！ウォー！」。

中大ボート部 平成8年卒
川原 有司

中央大学理工ボート部創部55周年おめでとうございます。

私は1992年に精密機械工学科に入学しましたが、スポーツ推薦入学で所属は体育連盟の方（当時、理工ボート部内では〝チャン〟と呼ばれていました）でしたので、残念ながら理工の皆様とクルーを組むことはありませんでした。

当時、スポーツ推薦で理工学部に入るのは非常に珍しい事で、入学時は〝チャン〟で唯一の理工学部生でした。

そんな状況で非常に心細かったところを、理工ボート部の先輩方をはじめ、同期や後輩の皆様が温かく接してくださったおかげで何とか卒業することができ、現在は株式会社シマノでロウイングボート用具の開発という、極めて稀な職を得ることができました。

世紀末の後楽園キャンパスで共に過ごした理工ボート部の皆様、本当にありがとうございました。

早稲田大学 理工漕艇部 監督
林 操

創部55周年、大変におめでとうございます。我が部も2016年に55周年を迎え、中央理工と殆ど同年代とのことで少なからず親近感を感じています。2012年秋より理工漕艇部監督をしています「林 操」です。1970年（昭和45年）早稲田大学理工学部卒業。正に「団塊の世代」の真只中の年代です。我々の時代には多種多様な目的を持つ、100名を超える部員を抱え本チャンを凌ぐ勢いを持ち、87年には全日本軽量級エイトで優勝。当時の日本漕艇協会の資金援助なしに寄付を募り世界選手権に出場しました。残念ながら、その後その伝統は途切れ一時は活躍する部員も数名となり活動が途絶えるかに思われましたが、10年程前から、OB会碧水会が挺入れを始め部員数も増えその活動は活発化しています。特に女子は、中央理工とはお互いに切磋琢磨し、その活躍が目立つようになって来ています。

中央理工との関わりという点で、私が学部2年の時に始め今年で50回を迎えた関東理工系レガッタが数年前に開催が途切れそうになり、その年の幹事校であった東工大OBの弾塚雅則氏と当部OBの小寺浩二と協力し、OBレースの開催を軸に大会の活性化を図りました。その際、特にエイトレースをメインに、中央理工、理科大にも声を掛け、中央理工連合、理科大連合、東工大連合、早大理工碧水会の四杯レースを実施する事ができました。懇親会では、昔のプログラムを持参された方がいらっしゃり、同年代同志で戦ったレースの思い出に華が咲き大いに盛り上がりました。その後の大会ではOBも運営にもに加わり、毎回楽しい大会となっています。

今回、寄稿依頼のあった岡崎充氏や現監督の中島弘高氏、その他他大の方々とは、その時以来漕友としてお付き合いさせて頂いています。ありがとうございます。

私自身は、ここ4年程体調を崩し病魔と闘っており、ボート漕ぎは出来ていませんが、現役がボートの楽しさを味わい、少しでも高いレベルで活躍出来るようにとサポートに傾注しています。

今後も中央理工ボート部とは、現役・OB共々大いに交流し、お互いに活躍できるようにと祈念しております。

PENTA ROWING CLUB
世話役
大野 政志

中大理工ボート部55周年おめでとうございます。長年にわたり世代から世代へバトンを引き継がれてきたみなさんの熱意に敬意を表します。

私は外語大ボート部OBで、理系ではないためか、学生時代の中大理工ボート部との思い出というものはあまり有りませんが、数年前に関東理工系レガッタのOBレースに（なぜか）出ることがあり、中大理工ボート部OBのみなさんとご縁ができました。

今では、「ペンタローイング」というボート漕ぎ仲間のコミュニティに、中大理工OBの方々もお誘いして、幅広い年齢（20代から80代まで）、職業、出身のボート仲間とのローイングを共に楽しんでいます。

今年のノーベル医学・生理学賞の受賞者が、基礎研究の大切さを訴えていらっしゃいますが、ボートもまたこの「基礎研究」の一種なのかもしれません。何の役に立つのかわからない、そういうものに打ち込める時期が、誰にも必要なのではないでしょうか。そんなボート部の若人たちを応援するとともに、私たちOB・OGも、生涯スポーツであるローイングを楽しんでいきたいと思います。

中大理工ボート部の100年後、2000年後の益々のご発展をお祈りいたします。

学習院大学 漕艇部 主将
岩井 健太朗

学習院大学漕艇部主将の岩井健太朗と申します。この度は創部55周年、誠におめでとうございます。

中央大学理工ボート部とは、冬季期間の合同練習や相模湖レガッタの際にお世話になりました。合同練習においては、部員数の影響で普段エイトなどでの大艇練習が行えない中、両大学共に刺激ある練習が行えたことを喜ばしく思います。

学習院大学漕艇部は、ボートを軸に部員一人ひとりの自立を目指しながらインカレ常勝校へと成長するため、日々練習に励んでおります。日頃の鍛錬のおかげか、全部員が入部した頃の姿から、心身共に成長しております。私自身、体重は53kgから69kgまで増えました。

今後の中央大学理工ボート部の更なるご躍進をお祈り申し上げるとともに、両大学共に、より一層ボート界を盛り上げられることを期待しております。

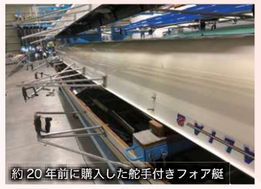
中大艇庫 設備・器具紹介

寂しく居座る体育館のバック台

OB会からの寄付により揃えたダブルスカルの駿河号

OBエイトクルーが借用しているチャン所有のエイト艇（UNITED）

新人練習用に活用される中大父母会所有のナックルフォア



約20年前に購入した舵手付きフォア艇

有光さんの研究により導入されたシングルスカル

中大理工所有のスカルオール

今はなきナックル艇庫の様子

中大艇庫の中で理工が良く活用する小艇たち

筋トレ用の新型マシン

最新型のシート可動式エルゴ

体育館の全景

新艇庫の中の男子更衣室の様子

合宿所内の理工部屋

合宿所内の食堂

全日本レースと応援団

歴代メインレース

関東理工系レガッタ

理工ボート部の理工ボート部による理工ボート部のための大会

開催時期	6月
開催回数	50回
主催	東京工業大学、早稲田大学理工学部、東京海洋大学のいずれかが主幹校
開催場所	戸田ボートコース
中大理工の出漕状況	2018年：M1×、M2×（2艇）、新人KF（3艇） 2017年：M1(2艇)×、混成W2×(2艇)、新人KF（2艇）

創設当初は、春練習の集大成となる上級生メインのレースであったが、現在は、新入部員のデビュー戦（新人ナックルフォア500m）や他大学混成クルー結成など、交流に重きが置かれている。開催に見合う出漕数が確保できないことを理由に、2010年前後は大会の開催が見送られてきた。2013年以降は長く参加してきた千葉大学や日本医科大などに加え、首都大学東京、慶応義塾大学医学部など、国公立大や医学部の参加校の幅を広げ、毎年10校前後で6月上旬に開催をしている。

この大会の醍醐味は、大学からのデビューや勉学中心での大学生が多い理工系の学生とOB・OGが一堂に会し、全体一丸となって大会を盛り上げるところである。特に大会終了後の懇親会は今でこそ大人しくなったものの、昔は「戸田のコースに嵐を呼んでいた」と聞いている。中大理工OB諸兄には、多くの思い出が秘められているようだ。

中大理工は、東京理科大と並び、幹事校の一校として本大会の中心を担っていた。（主幹校実績…1988年、1992年など）。現木村幹事長が4年生だった1988年の当時の話を伺うと、運営は調整ごとが多く大変で、部長だった（故）吉田正昭教授にも当日は1日中ご協力をいただいたとのこと。23期主将平山さんや24期和田さん、金谷さんが中心となって尽力されたと伺っている。

今年の中大理工は、新人ナックルが3クルーもエントリーし、OBエイトも含め総勢29人がレースに出場した。来年以降は新人だけでなく、上級生がスカル種目のレース経験を積む場としても活用して欲しい。また、4年連続で出漕しているOBエイトは一つでも順位を上げたいところ。

チームとして次なる大きな目標は、主幹校復帰。しかし主幹校を受けるとなれば、モーターボートの免許取得や運営面でたくさん準備が必要で、現役・OB含め多くの方のサポートが必要になる。皆で力を合わせて、実現させたい。

相模湖レガッタ

近いけど遠い相模湖

開催時期	9月末～10月
開催回数	62回
主催	神奈川県ボート協会
出漕数	大学10校、（杏林大学、北里大学、山梨大学、etc）
開催場所	相模湖
中大理工の出漕状況	2018年：W2×、M2×、M4× 2017年：W4×、M2×、M4×

理工ボート部の創設前から続いている相模湖レガッタは、毎秋開催される。

一昨年は3種目、去年も女子クオドルプルで入賞し、勝つレースを実現できている。今年は9月中旬と例年より早期に開催され、夏の集大成として男子ダブルスカル3クルー、女子ダブルスカル2クルー、男子舵手付きクオドルプル2クルーと総勢20名が参戦した。

中大理工は長い間、相模湖レガッタを秋の集大成レースと位置付けていた。1980年代はこれに向けて9月から合宿を行っていたほどである。42期山下さんが現役だった総部員数3名の時代も、相模湖レガッタの出場は続いていた。日本で一番、相模湖レガッタに注力してきたチームかもしれない。それだけに、毎年表彰式にて中大理工の名を呼ばれるようになったのは、感激もひとしおである。

相模湖駅は、JR中央線で高尾駅から一駅と決して遠いわけではないが、電車は30分に1本しかない。一方、オールや工具を戸田から運搬しなければならず、自動車運転手は、渋滞の名所の小仏峠を越えるのが苦痛となる。

練習やレース以上に金銭や労力がかかるため、「相模湖」と聞いただけで顔をしかめる現役部員も多く、我々にとって相模湖は「近いけど遠い」場所である。

また相模湖は、台風や大雨の影響で上流からやってくる流木でコースが使えなくなったり、観光客のスワンボートがレーンを塞いだり、急な大波を被ったり、ゴール地点が分かりづらかったりと、戸田ではあり得ないアクシデントも名物の一つだ。

しかしこのような面倒さを乗り越える工夫があるからこそ、大会が終わった時には、現役学生の顔に夏休みの大半をボートに注いだ充実感が滲み出ているシーンを見ることができる。その気持ちを忘れず、この大会の良さを次世代に伝えていきたい。

お花見レガッタ

新シーズン開幕戦

開催時期	3月末
開催回数	67回
主催	東京都ボート協会
開催場所	戸田ボートコース
今年の優勝校	M8＋日本大学、M4＋東北大学、W4× 法政
中大理工の出漕状況	2018年：W1×、M2×、M4＋ 2017年：W1×、W2×、M4＋

昭和の頃は一地方大会という位置づけであったが、平成に入ってから出漕クルーが激増。2018年の出漕クルー数は計310クルー、出漕人数は計781人（2014年は1048人、日本で1000人規模が出漕するレガッタはインカレ、朝日レガッタとこの大会の3つのみである。年齢や地域を問わず、多くのオアズマンにとって本大会がシーズン開幕戦となる。1000mレースでありながら、強豪校も出漕しており、お花見というのんびり感はなくガチレースとなっている。

中大理工にとっては、2010年前後の廃部危機を乗り越え初めて出場した1000mレースが2013年の本大会ダブルスカルであった（S…仲田、B桑原）。以降は6年連続で出場している。中でも、「男子舵手付きフォア」は5年連続で出漕。男子部員の大半はこの大会でスイープ艇デビューをしている。今年の付フォアクルー（S…55期今井、3…56期谷、2…56期塚本、B…56期宮本、C…56期加藤）は、3…32／1000mと中大理工のベストタイムを10秒近く更新！当時の今井主将を中心に昨年までの経験を活かし、結果に結びつけた。

お花見レガッタに向けた春練習は、年度末のテストが終わったことと寒さもあり、毎年幹部はモチベーション維持のために工夫と行動力が求められる。下の学年は新入生歓迎、3年生は就活に向けての準備も並行して進めなければならない。それぞれが異なる悩みや不安を抱えながら、一体感を作れるか否かが、部の行方を左右すると言っても過言ではない。この5年間は、他大学に声を掛け行う合同練習や艇の並べ、新しい取り組みによってお花見レガッタの好結果に結び付けてきた。今の1・2年生やこれから入部してくる人たちには、難題が待ち受ける春を乗り越え、自分自身の成長やチームで成果を出す喜びを実感して欲しい。

インカレ（全日本大学選手権大会）

受け継がれる熱狂

開催時期	8月末～9月
開催回数	45回
主催	日本ボート協会
出漕数	70校、336クルー、1078人
開催場所	戸田ボートコース
今年の優勝校	M8＋日本大学、M4＋日本大学、W4× 早稲田大学
中大理工の出漕状況	2018年：M4＋ 2017年：M2×

第1回大会が1974年に開催され、今年で46回目となった。毎年約1000人の大学生がこの大会に焦点を当てて活動する。大会1週間前になると、国立艇庫前は地方から運ばれてきた艇がごった返して、どことなく方言が飛び交うようになる。そんな日本ボート界最大のイベントは、昔も今も変わらない熱狂が続いている。

大会のトリを飾るのは男子エイトで、多くの大学オアズマンにとっての憧れの舞台であり続けている。是非多くの方にレースをその目で見て欲しい。

中大理工ボート部にとってインカレは予選突破が目標である。1998年35期亀島・36期白井の女子ダブルは見事にそれを果たした。以降は出場できない年が続いたが、ここ5年間は4度出場。去年までは最下位のレースしかできなかったが、今年の男子舵手付きフォア（S…55期今井、3…55期岡本、2…56期宮本、B…57期木村、C…56期塚本）は、初日に7分36秒という記録で2000mを最後まで安定的に漕ぎ切り、脱最下位を果たした。

中大理工のインカレクルーはインカレに向けた練習だけに専念できるわけではなく、部全体のマネジメントも必要となりどうしても時間が足りない。早朝や昼休みに乗艇するなど、限られた時間をフル活用して臨んでいる。

今後の現役部員は、インカレにどう挑んでいくか悩むと思う。きつい練習をしても負ける可能性が高いことにネガティブな気持ちになるかもしれない。でも、よく理解して欲しい。大半の人間は人生で全国大会に出る機会を一度も得られないが、我々にはインカレに出る選択肢があることを。現桑原コーチの現役時代最大の後悔は4年生の時にインカレにチャレンジしなかったこと。逆にインカレに全力を注いで、後悔しているOBはいない。今いる環境を利用して、青春を謳歌して欲しい。